

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1990—7



「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。  
 幼児の自発性を伸ばすには——  
 遊びの総合性をどう組み立てるか——  
 新しい教育要領をふまえた  
 『新幼稚園参考書』は  
 先生方の強力な助っ人です。

# 新幼稚園教育要領と実践 新幼稚園参考書

その教育と運営

全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著



## 目次より

### 第一章 幼稚園教育の本質を考える

- 1 幼児が育つことと幼稚園教育
- 2 幼児を理解する
- 3 幼児の生活とは
- 4 教育要領改訂の視点ととらえ方
- 5 幼児教育の内容と方法
- 6 私立幼稚園の特性と存在の意義

### 第二章 幼児の教育を計画し実践するために

- 1 教育課程・指導計画を考える
- 2 指導計画作成のポイント
- 3 指導計画の実例とその展開  
 ー長期・短期、年齢別、保育形態別

### 第三章 幼児の生活を考え充実させていくために

ー各園の実践例からー主体的生活・  
 行事・総合性・領域・障害児

### 第四章 園やクラスをいまいきと運営するために

- 1 園運営の基本的考え方
- 2 クラス運営の実際
- 3 保育の担い手としての保育者

### 第五章 幼稚園教育の歴史と展望

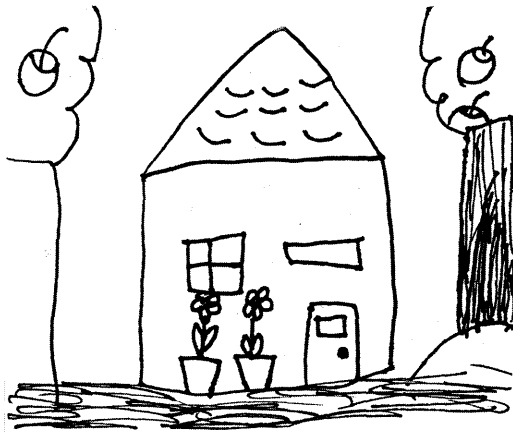
B5判・上製本・436頁

定価4,000円（本体3,883円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼見の教育



第89卷 第7号

幼児の教育 目次  
——第八十九卷 第七号——

© 1990  
日本幼稚園協会

〈巻頭言〉

変化への対応……………関口はつ江……………(4)

人間の成長における活動の意味……………津守 真……………(6)

特集〈車〉

タクシー物語……………K・M・H……………(15)

ミニ四駆流行事情……………秋田 輝喜……………(20)

遊びの中の電車……………西原 彰宏……………(24)

通園バスにて……………河野 道子……………(29)



チエコ便り(4)

プラハの子らの夏休み……………大槌 優子…(34)

園庭より(4)

忘れられない失敗……………松井 とし…(40)

ごっこ遊びと社会的知能の関連の可能性について……………柴坂 寿子…(42)

子どもの成長発達を促すために必要な童具についての考察(2)

西ドイツ製玩具・プレイモビルを利用しての実践研究の報告

……………芸術教育研究所…(52)

表紙イラスト・林 健造

扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／豊田 一秀・上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



## 変化への対応

関口はつ江

世界が大きく動きつつある現在、我が国の保育界も転換へ向かって動き出した。幼稚園では新教育要領に基づく保育が始まり、保育所保育指針も三月には新案が提出された。今、保育にかかわっている者が、この時にどのように行動するか、その責任は重いと云えよう。

海外でも様々な動きがみられる。筆者は少し前にイギリスの Department of Education and Science とフランス北部にある教員養成校を訪れる機会を得た。イギリスでは昨年九月に五歳児以上に対するナショナルカリキュラムを作成し、教育内容を十項目（言語、算数、科学、美術、体育など）定めたこと、また親にもできるだけ保育の場に参加してもら

うようにしていることなど、フランスでは一九九〇年より子ども学習評価を従来の一か年毎から三年の幅（二〜四歳、五〜七歳、八〜十歳）に変え、発達の個人差を配慮しようとしていること、一九九二年からは就学前、初等の教員と、中等、高等の教員養成を同じ制度で行い、幼児教育にも高度な知識や技術が必要となることへの対処をしていることなど、国情に合わせてはいるが、背後には幼小の関連を強め、教育内容の一層の充実をはかることへの意欲が伺えた。

そこで、我が国の変革の行方が気になるところである。今回の幼稚園教育要領の改訂に対して、「現場は結局は変わらないのではないか」とのささやき

が聞かれる。それは何故であろうか。

行きすぎた幼児教育の是正をはかり、幼児期に幼児らしい体験を十分にさせることが強調されているが、これは識者の認識ではあるが、幼児に直接かわっている親や教師自身がどれ程そう感じているのか、との素朴な疑問がある。幼児に必要なものが何か、の共通認識が欠如し、「建前と本音」論で逃げているのが現状のように思われる。

幼児教育のみならず、「教育」の目的及び方法に対する考え方が揺れ動き、子どもの実態に対応しきれていない現在、せめて保育にたずさわる者は、しっかりと「何が大切なのか」を知っていなければならない。

保育の内容や方法を変えるのは「幼児本来のもの」「変わらざるもの」を守り育てるためのものであり、本来目ざすもの、育てるべきものが変わるわけではなからう。「幼児らしさを発揮させるため

に」「幼児らしからぬ」と見られて来た活動が展開することもあり得よう。これからは見える部分と見えない部分の在り様の関連についての把握が特に必要になるう。

自然的にも社会的にも急速に変わりつつある環境のもとで、その行動や感覚が変化して来ている幼児に応ずるためには、保育（保育者のかかわり、保育の素材など）が変わらなければならない。こちらが変わらなければ、幼児は更に変わらざるを得ないことへの自覚が求められる。保育者は対象の変化への鋭敏な感覚と変わらないもの（教育の原点、その目的）への確固たる信頼の感覚を、バランスよくもち合わせると共に、皮相的な変化への対応は新たな固定化を生むことに注意して、慎重なそして確実な保育の転換にむけて歩を進めたいものと考ええる。

（郡山女子大学短期大学部）

# 人間の成長における活動の意味

津守 真

大人が意図をもって導入する活動は、保育においてどのように考えたらよいのだろうか。私はこのことを考えていたとき、ジョン・M・エリックソンの『活動、回復、成長』<sup>(註)</sup>という書物に出会った。彼女はオーステン・リッグス・センター (Austen Riggs Center) という精神障害者の施設で、長年仕事をしてきた人である。今世紀の著名な心理学者、エリック・H・エリックソンの夫人で、彼女自身、工芸家である。この書物にはエリック・H・エリックソンのあとがきが付け加えられている。

私共の仕事はいつでも、前の時代から引きついだ途上にあり、同じようなことをしながら、そこに新たな活力を吹きこむことがたえずある課題であると私は考えているが、オーステン・リッグス・センターの場合も同様であった。エリックソン夫妻が着任する以前にも、ここでは伝統的なオキュペーショ



ン（作業）がなされていたが、彼らはそれを活動の概念へと変えたのだった。その過程を次に紹介し、人間の成長における活動の意味を考えたい。この書物では最初にオキュペーション・セラピーの歴史が述べられる。

#### オキュペーション・セラピー（作業療法）

精神障害者の施設には、今世紀の初頭に、オキュペーション・セラピーという考え方が生まれた。精神病の患者は、何かをする状態をつくることによって、精神の健康を回復するという考えである。その作業に実利的な意味はなくとも、人が心を奪われ（心をオキュバイされ）てすることがあるという事自体が、精神の健康にとって必要だとオキュペーション・セラピーは考えた。そして、そのために種々の手仕事や施設に導入された。

一九〇八年には、シカゴに、精神病院の看護婦のための手仕事遊びのコースを備えた学校がつくられた。一九一〇年には、スーザン・E・トレーシーによって、看護婦のための手仕事のマニュアルが編み込まれ、手仕事を専門とする役割の人をオキュペーション・セラピストとして位置づけた。オキュペーション・セラピーとしての作業は、手芸であれ、陶芸であれ、患者自身のためのものでなければならず、それ以外の目的のためであってはならないと考えられた。心を奪われ没頭する作業があると、人生に対する態度が変わる。そのような作業は、医学的診断とはかかわりなく、本人の能力と興味に従って徐々に作られてゆくものであって、普通の生活にもどつてもつづけられる、個人の人生の一部をなすものである。その指導者に必要なことは、第一に熱意であり、第二に興味をひき出す能

力、第三に工夫力と柔軟性、第四に、仕事をはじめさせる能力である。これらはオキュペーション・セラピーの基本をなす考えであるが、これは丁度同じ時期にはじまった当時の新教育運動を思い起こさせる。所も同じシカゴである。その新教育運動によって幼稚園や小学校が、自由な教育形態を重視すると共に、図画工作や音楽、手技などを教育の内容として取り入れたのであった。オキュペーション・セラピーは障害者の分野で提唱された運動だったが、新教育と同様に、主体である人間を尊重することに於いて、根をひとつにする運動だったと考えてよいだろう。

#### オキュペーション（作業）から活動へ

第二次世界大戦後も、今日に至るまで、この考えはつづいているが、二十世紀後半になって、人間の成長や発達の研究が目ざましく進歩し、オキュペーションや作業はどのような位置に立つのかが問われるようになった。一九五一年に、オーステン・リッグス・センターに、エリクソン夫妻が着任したとき、彼らは、オキュペーションと成長・発達との中間に、活動 (activity) を考えた。つまり、人がアクティブに、積極的にかかわることによってオキュペーションが意味をもつという考えである。物とかかわり、人とかわり、また、自分を非活動的にする内なる葛藤とかかわるところに活動がある。

従来のオキュペーション・セラピーとしての作業は、そのときにもあったのだが、オキュペーションという考えだけでは不十分であることをエリクソン夫妻に気付かせたひとつのエピソードがある。それはそのセンターのお祭りのときに起こった。ひとりの少女が次のような歌を歌った。

大きな織機の前に、くる日もくる日も

一日中座って、私は織っている

何をつくっているのか 神さまだけがご存知だ、だれのために織っているのか 神さまだけが知っている。

皆は拍手をし、笑ったが、エリクソン夫人は笑うことはできなかった。

何故、織機の前に一日座って、先生によってあらかじめ決められたデザインを作らねばならないのか。素材についても、機械についても、何も学ばず、親戚のために、いつ果てるとも分からない作業をしなければならぬのか。何故、自分の部屋のカーテンや食堂のテーブルかけを、自分でデザインして織ってはいけぬのか。

施設の中でいろいろの作業がなされていても、それが自分のものになっていない。そのことに自分自身がかわっていない。それをするのが、人間的に成長する力を育てるものとなっていない。この書物の中で次のように書かれている。

「私の夫のエリック・H・エリクソンと私は、新しく着任したばかりだった。彼は青年期の研究を追究しており、リッグス・センターにおける青年のアイデンティティ（同一性）の混乱が、さまざまな症状となってあらわれるのを見ていた。私は彼のアイデアについて議論を交わしていたが、私自身の背景は工芸家としての仕事であった。……」率直に言って、この歌が皮肉に語っていたことは、

私が人生の諸段階で大切と考えていたことに触れていた。とくに彼らが新たに自分自身を回復しようとしているときに、こういうことは許せないと感じた。そして尊敬すべきオキュベーション・セラピーが、この私立の小さな病院で、すでに時代遅れのものになってしまっていることにショックを覚えた。……」「そこで私はその施設の慣習や組織については何も知らないのに、大きな熱意をもってこのことに立ち向かったのだった。憤りから発した、抗し難いエネルギーに促されたことであつた。こうして、いろいろの作業が廃棄され、新しい活動が導入された。手芸、陶芸、金工、木工などの「ワークショップ」「美術」「演劇」「ナースリースクール」「園芸」が、主たる活動となつた。

これらの活動にはオキュベーションと違って、次のような特色がある。

○それを行うことが、能力や技能をつけることを目的とするのではなく、その人の中に眠っている能動性にかかわる力を育てるものであること。

○病院や施設の生活に慣らされたために退行し機能しなくなっている、人生に対する肯定的なアイデンティティを回復し、成長させること。

○病院や施設の中で、世話される人としての役割からぬけ出て、一人前の人間としてのプライドをもって立てるようにすること。

○活動は治療効果があるからするのではない。それぞれの活動は、それ自身が専門分野として意味をもつものであり、指導者はセラピストではなく、各専門分野で専門家として自立している人たちである。患者がそのような活動に参加することが、結果として最良の治療効果をもたらす。

## 人間の成長における活動の意味

このような活動をすることによって、人は成長する。すなわち、活動自体に意味があるのではなく、その中で人が成長することで意味がつけられるのである。

エリック・H・エリックソンは、よく知られているように、人間の生涯の発達を八つの時期に分け、各時期に人が当面する危機を示した。たとえば、第一の時期（乳児期）には、基本的信頼と不信との間の危機がある。これは赤ん坊の母親に対する信頼感の問題だけではない。手仕事をすることに自信を失った人が、教師の助力によって、自分でためし試みる者としての自己信頼を回復することができない。自分にはそんなことはできないはずがないと言って、自己不信の中に逃げこんでしまう方が楽かもしれない。しかし、だれでも、それまで生きてきた自分とは違う新たな可能性を自分の中に発見することができるといふ自信を回復するならば、そこから次の成長がはじまる。信と不信との危機は、活動を通して克服され、人は生命的に生きられるようになる。教師のなすことは、活動によって人が生きるようにすることである。能力や技能は結果として生まれるものである。

第二の時期（幼児前期）には、自律と恥・疑惑との間の危機がある。自分が選択し、自分の意志によって決断する自律性が生じるのが幼児前期である。しかし、自分の行動が大人の期待に沿わないのを認識すると恥ずかしいと感じ、自分で自分をコントロールする能力がないのではないかと自己疑惑が生まれる。そのことが、自分で選択することを困難にする。これは幼児期のことだけではない。大人によって活動のスケジュールがきめられ、命令的になされるところでは、自分で選択する意志は生まれない。まず、活動を自分が選択して参加することが出発点になる。オーステン・リッグス・セ

ンターでも、ある手仕事を患者がはじめるまでに、長い期間迷い、ひとたび自分から始めたときに目覚ましい進歩をした例が数多く報告されている。

第三の時期（幼児後期）には、自発性と罪悪感との間の危機がある。いろいろの素材、道具、技術をためし、それになれてくると、人はそれらを用いて何かを作ろうというプロジェクトを自分でつくり出す。これが自発性（イニシヤティブ）の感覚である。自分は間違ったことを考えているのではないかという罪悪感によって抑制されすぎると、自発性を十分に発揮し展開することが困難になる。幼児後期には、子どもは心の中にいろいろのプロジェクトを展開させ、それが遊びとなり、友だち同士で目的や意図を共有する。その過程の中から、次の時期の有能性（コンピテンス）が生まれる。つまり、互いの競い合いの中で磨かれる力である。活動がそこまでに達すると、専門家が一緒に傍で仕事をしているだけで立派な教師としての役割を果していることになる。

人間の成長はこの後の時期へと更につづくが、別の機会にゆずる。

手仕事の「ワークショップ」の中で、自律性、自発性、創造性が成長する。また、よい文学作品は、人間の葛藤、緊張、危機をはらんでいて、多くの人に訴える力をもっている。その中の役をとることによって、同一性の混乱の中にある青年は、同一性を発見する。これが「演劇」である。また「ナースリースクール」で幼児の葛藤や挫折、その回復する姿に直接ふれることにより、大人もまた自分自身を受けいられるようになり、他人を認めることができるようになる。基本的信頼は、すべての活動の根底にあるが、「園芸」によって人は大地の生産性に参加し、宇宙に対する信頼感が育て

られる。

ここに述べてきた活動は、大人の諸活動であって、時間、空間の面でも、その他の生活の部分から切り離されている。指導者もそれぞれの分野の専門家である。

子どもの保育の場合には、活動と生活とは互いにいりこんでいて切り離せない。子どもは遊びの中でいろいろな活動をするが、それらは時間的、空間的にひとまとまりのものとして考えることがむずかしい。その流動性の中でこそ活動が子どもの成長を助けるものとなっている。大人にも子どもにも共通なことは、活動は単なる作業や課業ではなく、その活動をすることによって人間が成長するという点である。

こう考えてくると、子どもの生活の中に、活動を分化させるのには、時期と方法、指導者の考え方などが考慮されねばならないことがわかる。定まった時間に特定の活動を設定すること自体に意味があるのではない。

エリクソンが言うように、「真の教師は、素材の傍に立ち、その性質を生徒に解釈する。それによって生徒は自分自身をあますところなく開き、素材の本質に気付くようになる。生徒がその経験に對して準備ができそれで遊べるようになったら、彼は次に何を知る必要があるかをたずね、そしてそれを教えてもらおうだろう。このような教育はそれ自体が芸術である。」このことは大人にも子どもにもあてはまる。私の学校の子どもが、のりをベトベトにしたり泥をこねたりするのも、これに通じる

ことだと考えながら、私はこれを読んだ。

(愛育養護学校)

(註) Joan M. Erikson : Activity, Recovery, Growth. —The Communal Role of Planned Activities,

Postscript By Erik H. Erikson. W. W. Norton & Co. 1976





タクシー物語

K・M・H

◆ エピソード(1)——深夜のおしゃべり——

⑥「〇〇まで。ごめんなさい、こんなにおそく……」

⑦「いゝえ、丁度、そちらへ帰るところでした。

今夜はもう切り上げるつもりだったんです。わたしんちは〇〇の先ですから、そっち方面のお客さんでラッキーでした。空車で帰るよりは、ずっと助かります。」

⑧「まあ、それではお互いに助かったのネ。それ

は、ようございました。」

⑨「お客さん、東京の方ですね。それと、ちゃんとした方の奥さん？ それに、もしかしたらお仕事もお持ちで？」

⑩「まあそんなところかも知れませんけれど……でも、どうして？」

⑪「いや、きちんとした言葉を使いなされるから。

この頃の若い人とは大ちがいです。皆さん、身なりは立派だが、言葉使いはメチャクチャですからね。わたしらみたいなのは、召

し使いか何かのようにあしらわれます。『一寸、一寸、オジサン、そっちじゃないよ。こっち曲がるんだって言ったじゃないか』なんて、きれいな娘さんが怒鳴るんですからね。」

客 「みんな忙しいから、イライラしてなさるんでしょう。東京はゆとりがなさすぎるんですよ、きつと……。」

運 「忙しいのはお互い様ですがね、ありがとうございますか、すいませんぐらい言ってもバチは当たりませんでしょうよ。まあ、親や学校のしつけが悪いんじゃないですか。」

客 「そうかも知れませんが……。運転手さん、お子さんは？」

運 「三人ですよ、男の子ばかり……。だから、親爺としては、もう暫く頑張って学費ぐらい稼がなきゃと思ってる所です。いやあ、この頃は、男の子は大学ぐらい出さなきゃネ。」

客 「それは大変ですこと。でも、お楽しみです

ね、男のお子さんばかりなんて……」

運 「いやあ、小さいときは大騒ぎでしたがネ。まあ、一人はもう大学生になりました。次が来年受験です。」

客 「まあ、暫くは受験々々でお大変ネ。でも、もうほんの一時ですネ。大きくなってしまえば、アツという間ですもの……」

運 「お客さん、お子さんは？」

客 「ええ、もう独立しました。」

運 「じゃ、ご主人とお二人で？」

客 「ええ、静かになりました。子どもって不思議なものですネ。一時は受験やら就職やらと戦争みたいでしたのに。サーッと潮が引いていくみたい……。」

運 「羨ましいみたいですネえ。じゃ、いまは、悠々とお二人で……。それに、奥さんもお仕事があるなざるなんて、理想的ですね。」

客 「いいえ、ただ、たまたま、そういうめぐり合

わせで、仕事に復帰出来ただけですけどネ。あら、そろそろね。あ、その角を曲がってください。右側の二番目の家です。

どうも、ありがとうございます。

⑤ 「どう致しまして……。奥さん、いま、おつりを差し上げますが、一寸、クイズを一つ。いいですか？ クイズですよ。

綿一キロと鉄一キロと、どちらが重いでしょう？ 奥さん、わかりますか？」

⑥ 「どちらも一キロだから、同じって答えるんですけど？ ちがいますか？」

⑦ 「ハハハ、それがちがうんです。もちろんネ、秤にのっければ同じですけど、足の上におっことしたと考えるとちがうなさい。綿は痛くないけど、鉄の方はものすごく痛いでしょう、重さの感じというのがちがうんです。」

⑧ 「なるほどネ、客観的な重さと、主観で感じる重量感とでもいうのかしら。明らかにそういうこ

とはありますでしょうね。運転手さんは、なかなか哲学者ネ。」

⑨ 「いやあ、お客さんがいいお方だから、こんなおふぎをさせて貰いました。おかげ様で今日はいい一日でした。ありがとうございます。じゃ、おつり……。ハイ、どうも、おやすみなさい。」

◆ エピソード(2)——自殺志願者？——

⑩ 「ああ、すみません。手を上げてなさるのに気がつかなかった。どうぞ、のってください。」

⑪ 「まあ、よかった。乗車拒否かと思いました。だって、知らん顔で行き過ぎてしまうんですもの……。バックしてらした時は、何事かとビックリしました。」

⑫ 「ほんとにすいません。気が付かなかったんです。ポーツと考え事してたんですかねえ。」

⑥客 「明け番ですか？」

⑥連 「いいえ、いま出てきたところなんです。この頃、もう、そんなに頑張る気がなくて、気ままにしています。夜なんか走りません。その点、個人タクシーは気楽ですから…。一日中、家にいても、一人っきりで仕方がないから、走ってるだけです。」

⑥客 「運転手さん、ご家庭は？ お一人暮らし？」

⑥連 「ええ、カミさんに死なれました。子どももないし……。ついつい、ポーツと走ってしまうのは、何だか気持ちが悪くしてしまいました。子どももいません。稼いだってどうなるもんじゃなし……。」

⑥客 「それは、お淋しいわね。運転手さん、ご郷里は？」

⑥連 「佐渡ですが、もう誰もいません。帰ってみたいけど、浦島太郎みたいじゃないしょう。」

⑥客 「そうかしら、でも、佐渡っていい所でしょ。」

う？」

⑥連 「カミさんでも生きてれば、一緒に帰るんですがネ、もう、どうでもいいという気分です。このまま、死んじまってもいいかななんてネ……。」

⑥客 「まあ、でも、またいいこともありますよ。元気で働いていなされば……。じゃ、お気を付けて。どうも、ありがとう。」

◆ エピソード③——桜メール——

⑥連 「お客さん、ものすごく急いでなさる？ 少し、時間ありますか？ 廻り道したいんですけど……。」

⑥客 「どうして？ 道路工事が何かですか？」

⑥連 「いえネ、一寸、お見せしたいものがある……。何、お急ぎならいいんです。」

⑥客 「何でしょう？ 少しぐらいなら廻り道しても」

いいんだけれど……。」

④「OK。じゃ、一寸、遠廻りします。何、ほんの一寸だけですよ。」

⑤「まあ、見事な桜！　まるで花のトンネルね。こんな所があるなんて知らなかった。何と見事なんでしょう！」

⑥「見事でしょう。すっかり咲き揃いました。出来るだけ、沢山の人に見て貰いたくてネ。花の好きそうな方は、廻り道して花見をして頂くんです。」

⑦「まあ、そのための廻り道でしたの。それにしても、何と見事な！」

⑧「でしょう。花のトンネルです。有名じゃないけど、この辺では一番いい桜並木ですよ。どうです？　見事でしょう？　どうですか？」

◆ エピローグ

タクシー・ドライバーは、都会という荒海の孤独な漂流者。だから、二度と会うこともない乗客との間に、束の間の交流を求めののかも知れない。それにしても、三人の運転手さんたちは、今日は、どこを走っていることだろう。どうぞご無事で！

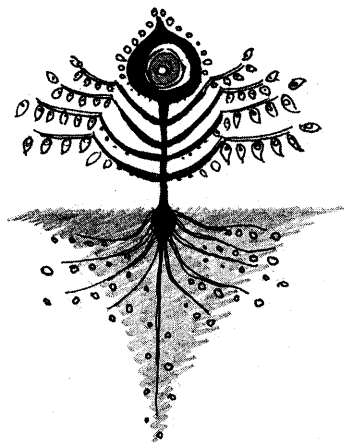


## ミニ四駆流行情

秋田 輝喜

最近、町のおもちゃ屋の前に「ミニ四駆今週入荷」とか、「いついつ発売」とかいうちらしを見ることが多い。ミニ四駆、これは、T社から発売されている組み立て式四輪駆動プラモデルの総称である。四駆というように、モーターからギヤを使い、後輪と同時に前輪を動かすという方法で、四つの車輪が同じく前進運動を行うというシステムをとっている。

ミニ四駆は、いつ頃から子供達の間で流行りはじ

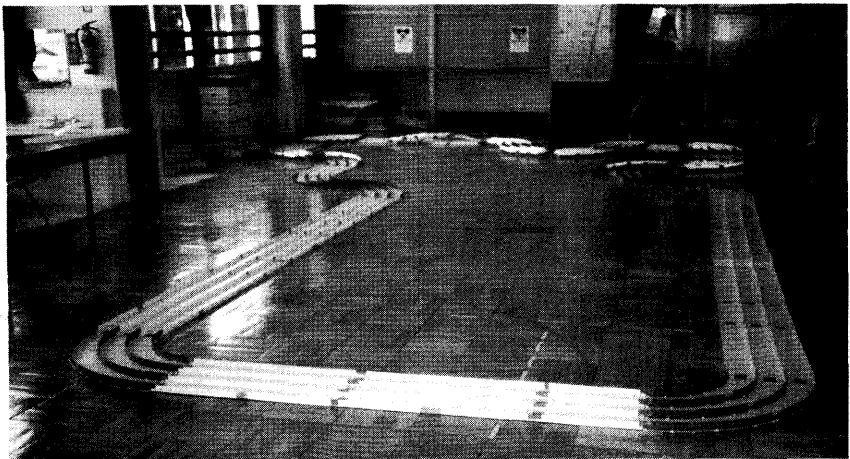


めたのであろうか。昭和六十二年頃、一部の子供達の間で行われていたが、そのころは、ミニ四駆のキットが品切れになり、購入するまでに何日もかかるといった話は、あまり聞くことがなかった。子供達は、作り上げた車を並べては、走らせていたが、レースなどと言えるものではなかった。

ところが、ミニ四駆のことが、小学雑誌などで取り上げられ、塗装もオリジナルなものが増えてきた。町の模型ショップの中には、店主が作ったサー

キットも現れ、毎日、時間を決めてレースをしたり、日曜日ごとのグランプリレースなど行うところも出はじめた。また、ミニ四駆キット製造会社からは、自在に組み立てられるプラスチックのサーキットセットも市販されるようになり、ミニ四駆の流行の一翼を担った。子供達は、キットに組み込まれたモーターではあきたらず、より早く走るために作られた、ハイパワーモーターや、ニッカド電池、転倒防止用のスタビライザーボール、側壁にタイヤがぶつからないように配慮されたローラーキットも発売されるようになった。

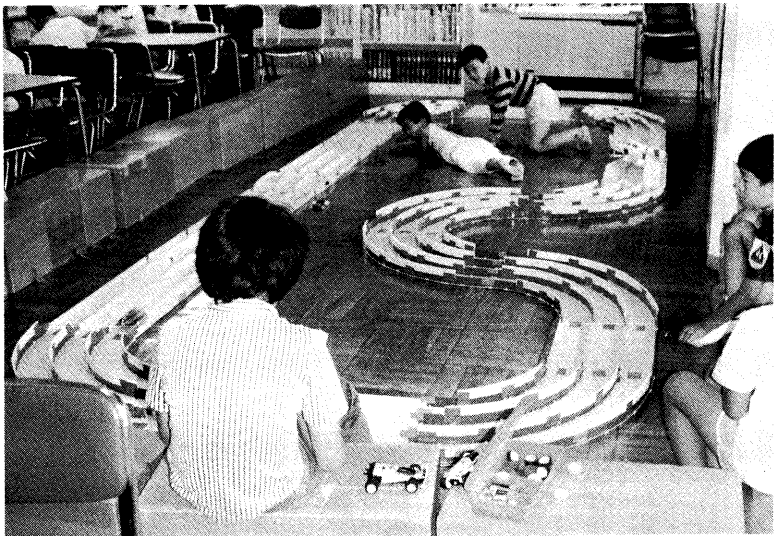
子供達は、なぜこれほどミニ四駆に夢中になったのであろうか。従来までの車の玩具と言えば、ミニカーが知られている。これは、過去から未来まで、実在のものから空想のものまで、ほとんどの車を鋳型のプレスで作り、オリジナルの塗装をして市販されている。ここでは、現在のようなミニ四駆ほどのブームはなく、子供達が成長の中で通る遊びの一つ



▲ ミニ四駆のコース

としてとらえられていた。ミニカーは、そのもの本来のオリジナリティーを変化させて遊ぶものではなく、ごっこ遊びの中で、あるいは、コレクションの一つとして、子供達それぞれの嗜好の中で選ばれたものであった。現在でも幼児から小学校低学年ぐらゐまでは、ミニカー遊びを行っている子供達も少なくない。大人の中にも、温故知新ではないが、一九五〇年代、一九六〇年代とさかのぼり、ミニカーを収集している方もおられるようだが、子供達の遊びとは、子供達のミニカー遊びとは、ちがった動機づけによるものであろう。

ミニ四駆の魅力について子供達に話を聞いてみたことがある。ミニ四駆で遊んでいる年齢層の中心は、十歳〜十二歳の男子、学年で言えば、五・六年生が主体のようであった。ここで興味深かったのは、三・四年生でも数多くのミニ四駆ファンはいるが、それぞれ組み立てたミニ四駆に個性があまり感じられない。五・六年生になると、自己の個性が組



▶ 児童館のコースで遊ぶ



み立てられたミニ四駆のすみずみに感じられる。ここにはレースに勝とう、速く走らせたいということはあるが、自己の個性を主張したい、見せたいという願望が強く感じられる。そのため、塗装に時間をかけたり、部品の交換がほどこされているものが多い。このように、マニアックな部分と、誰でもが親しめる部分があるから、子供達の中にも受け入れられ、ひろまったのではないだろうか。また子供達にとって、ミニ四駆の価格が手頃でおこづかいを少しためれば、あるいは、範囲の中で買える、部品もそろえられるといった所も、大きな魅力となっている。電子ゲームのように、遊ばれるのではなく、遊べる、自己主張が大きく出せる。手の中に入り、愛玩できる、この部分は、子供・大人に限らず共通している所で、手の中に入る・持てるという物への人間の愛着は、歴史的にも、心理学的に見ても顕著である。

このように、子供達の遊具の流行を見てみると、



ミニ四駆大会。自分の愛車をもちよって競う

値頃感の強いもの、愛玩できる物が、その時代々々の主役を握っているようである。電子ゲームの流行や、ラジコン四駆などにより、この傾向に変化をみせてはいるが、本質的な部分は、大きく変わっていないようである。また大人から子供へと流れていた流行のパターンも、現在では、逆行している部分も多くみられる。ここには、子供達の情報量の増大という

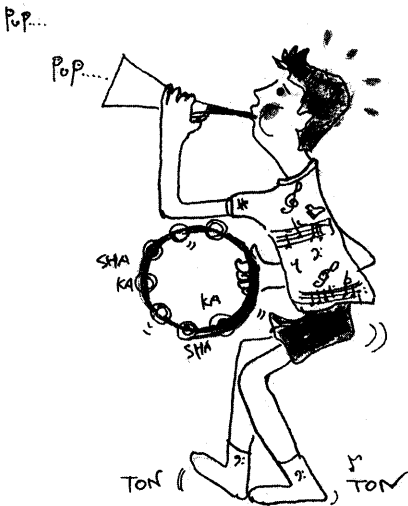
## 遊びの中の電車

西原 彰宏

問題も多分にふくまれている。

ミニ四駆の六〇〇円という価格が、高価なものであったかどうかは、それぞれが成長し過去を振りかえった時、自分自身の想い出の中にどれだけかわっていたかにつきるのではないだろうか。

(板橋区大原児童館)



私がつとめる養護学校の子どもたちの中には、電車が好きな子どもが何人もいる。それぞれの子ども遊びの中にあられる電車のイメージは個性的である。その一方で、それらをあわせたものは、子どもにとっての電車のイメージを公倍数のような形であらわしているようにも思えて面白い。

K太はブラレールの模型電車で遊ぶ時、陸上競技場のトラックに似た、単純な線路をつくらせる。そして必ず、モーターのついた車両だけを走らせる。さらにもう一台を線路に乗せる。二台の車両は、小さな生き物が追いかけっこをしているように、勢いよく走り回る。K太は、それを見ているうちに、まるで電車を応援するかのように両方の手のひらをハタハタと振り、うれしそうに笑う。

この子どもにとって、電車は自分の力で躍動的に動く、生命に満ちあふれた存在でなくてはならない。決して客車を引いてのろのろ走ってはならない

のだ。

また、この子どもは追いかけっこをすることを好む。ぐるぐる回る電車は、すべり台やトランポリンのまわりで大人と追いかけっこをするK太の姿によく似ている。K太は、エネルギーに走り回る電車に自分のイメージ、あるいは、そうありたいと望む自分のイメージを見ているのだと思う。

U平は、引き戸になった出入口に、一瞬胸からもたれかかることがある。ふだんは何かどたばたした動きの多いこの子どもが、急にゆっくりとした動きで二、三步移動して左手首を見て何やらする。と、また出入口にもどつてもたれかかり、半身をのり出すようにして右腕をおもむろに前方にあげる。

電車が駅に着いた時の車掌の動作をまねしているのだ。

この子どもがまねするのは、あこがれる気持ちがあるからだろう。この子の目には、職業的要請に

よって洗練された車掌の正確で無駄のない動作が、何か美しい舞踏のように見えているのではないか。

U平は、模型の電車の車両をいくつもつないで長くする。それを何本か作って床に横に並べて、電車の先頭をきれいにそろえる。自分もはらばいになって、目線を床すれすれにする。電車の一本をゆっくり動かしながら、ドドドドドドという電車の音をゆっくり言ったり早く言ったりする。そうやって、どこかの駅で急行電車の通過待ちをする場面を再現して遊ぶ。

C介が好む〈新幹線ごっこ〉は、イスを列車の座席のように並べておいて、自分は乗客になる。他の子が一緒に座ってくれるとなお良い。大人には乗務員のまねをさせる。まねは停車駅と到着時刻の案内からはじまって、洗面所、電話の案内、食堂の案内など、微に入り細をうがつほど良いらしい。C介は、ココッコッコ、ココッコッコと列車の音のまね

をしている。鉄橋にさしかかると、カッカカカ、カッカカと音を変える。大人ははさみやホッチキスをもって切符の検札をしたり、おもちゃかごを抱えて車内販売をする。

「えー、コーヒーに紅茶、ビールにおつまみ、ジュースにチョコレート、おせんべいはいかがでしょうか。」

と、全部言いおわらないうちに、C介は

「チョコレート」

などと叫ぶ。

「ユュー（自分のこと）ネー、シート、シート……ジュース。」

と、ふだん母親から止められているあこがれの飲み物を、とろけそうな笑顔で口に出すものもいる。

大人は車内販売を何度もくりかえさせられる。空想の中で、子どもたちは食べきれないほどのお菓子を買いこむ。

子どもにとっての電車の魅力とは、電車だけでなく、窓から見える景色、レール、駅、車掌や駅員やアナウンス、車内販売、果ては乗客まで含んだ全体の魅力なのだろう。

(また他の子の話になるが、ある日私を含めた大人数人と庭のベンチに腰をおろしている時、突然ガタンガタンと電車ごっこを始めた。大人と一緒に声をあわせようとすると、急いでそれを制止するように「ねてて」

と言った。この子どもには、眠っている乗客までもが電車の興味深い要素なのだろう。)

子どもが、自分から動くことを体験し、自分で遊びをつくり出し、自分の生活を自分で築く自信をつけてゆくにつれて、電車の遊びも形を変えてゆくように見える。

C介は、私共のところ週二回通っていたころは、電車、電車と泣きながら、新しいプラレールの

電車を探していつまでもさまよい歩いていた。一緒にいる保育者が、今日は新しいのはないのだといくら説明してなだめても、すべての戸棚をあけさせ、それでもあきらめ切れずに泣き続けていた。C介は、確固としたものがなにもない世界を、足が地につかない感じでさまよっているように見え、また、ないことを知っているからこそ探しているようにも見え、ということ、保育後のスタッフのミーティングで何度も話しあわれた。なにかが自分に欠けていて、それを自分で満たすことができないということの表現ではないかという保育者もあった。六歳になる年、母親は自分で決断し、それまでかけもちで通っていた他のいくつかの施設をやめてここだけにすると私共につげた。C介は落ちついた生活を送るようになった。

それから一年たった今、C介は登校するとまずプラレールで遊ぶが、すぐに他の遊びに移ってゆく。一人で庭の水たまりに絵の具をとかしたり、ロッ

カーによじ登って歩いたり、やりたいことは山ほどある。新しい電車は二週間に一度買うという約束になっている。新しい電車を手にした時は

「やったあ。」

とどび上がった叫ぶが、箱からとり出したあとはずぐにあきて他の遊びに移る。しかし、帰りぎわには必ず、持って帰る電車を選んで、自分でビニール袋がいっぱいになるまで入れる。

〈新幹線ごっこ〉はほとんどしなくなった。自分で遊びを見つめるようになってゆくとつれて、ただ座って乗客になり、大人のいう通りに切符を出したり、お菓子を買ってお金をはらったりという受け身の遊びにあき足りなくなったのだろう。さまざまな場面で、

「自分で、やる。」

と、大人の助けを断ることが多くなった。一人で熱心にプラレールの線路をはずしてつけかえていることがある。新しくバイパスをつけたり、高架につく

りかえたりして

「できた！」

とつぶやいている。

大きくなったなら何になりたいかと問われて、乗り物の運転手と答える子どもは多いと思う。この子どもたちは、乗り物に乗ることに魅力を感じ、その運転手になることで一日中乗っていられると考えるのだろうか。学校の子どもたちを見ていると、少年期に飛行機にあこがれ、パイロットになろうと考えていた私自身をふりかえっても、どうもそうではないように思える。

子どもたちは、力強く前進し、見知らぬ世界に自分をつれてゆき、自分の世界を拡げてくれる乗り物に、エネルギーと自由の象徴を見、理想の自分を見られるのではないか。運転手になりたいとは、そういう自分を獲得したいという意味なのではないか。

われわれ大人は、平凡な日常生活のひからびて固

い地面を掘りさげることさえ、幸せを今・ここではない、どこか遠くに求めて旅行にあこがれ、乗り物にかの間の現実逃避の夢を託する。乗り物に対する子どものあこがれは、それが一見どれほど単

純であり、固執と見えようとも、もっと前向きで、必死なものを含んでいるように思う。

(愛育養護学校)

## 通園バスにて

河野 道子

今年もまた、新入園児を迎える季節がやって来た。入園式を終えてからしばらくの間は、緊張した面持ちの子ども達が、親に手を引かれて通園する。やがて子ども達の顔に緊張の色が消えた頃、通園バスが親の代わりを勤めるようになる。もちろん個人

差があつて、一斉に乗り始めるわけではないが、一学期が終わる頃には、希望したほとんどが、家から最も都合のよい路線の停留所で、乗り降りするようになるのである。

A子は、入園する前から、停留所で姉が通園バス

に乗り降りするのを見ていた。A子は早く大きくなっておねえちゃんのようにになりたいという気持ちから、通園バスにあこがれを抱くようになった。三歳で入園して、順調に園生活に慣れたA子は、念願の通園バスに乗れるようになった。通園バスには姉も乗っているし、バスから見る外の景色は珍しくて飽きないし、楽しく話をする仲間もできた。何の不安もなくバス通園する毎日だった。子ども達は、担任が自分のバスに乗ると、とても喜ぶ。A子も担任がバスに乗る日には、嬉しそうな顔を見せた。

ところが、A子はあるとき毎日のように、どうしても迎えにきて欲しいと母親にせがんだ。園で何かあったのかと心配したが、よく話を聞いてみると、友達を迎えに来てもらっているのを見て、うらやましくなったらしい、との母親からの報告があった。「今日はお母さんがお迎えに来てくれるんだよ」と言ったときのA子の輝くような顔は今でも忘れられない。担任がバスに乗ったときに見せた嬉しそうな

表情も及ばない笑顔だった。

考えてみれば、通園バスは、一般に、たくさんのお園児を集めた園と、通園させるのに都合がよいとする親の、言わば大人側の便宜によって運行しているものである。子どもにとって、母親なり父親なりに迎えに来てもらうに越したことはない。なぜなら、帰る道すがら、「今日は幼稚園でこんなことがあったんだよ」とか「あそこにあんなものがあるよ」などと話をしながら、本当に楽しい親子のひとときを過ごせるからである。幸いなことに、私の園では昨年からは、土曜日は通園バスが連休となり、子ども達が母親や週休二日の父親と嬉しそうに通園する姿を見る機会が増えた。送り迎えはたいへんなのに、と不満を述べる親もあるにはあったが、世の中心全体が忙しくせわしない昨今、土曜日のほんの一時を子どもと楽しく過ごす心のゆとりが親にも必要なのではないかと思う。

ところで、通園バスは大人の都合で運行している



ものであると述べたが、その中で子ども達はつまらないさみしい思いばかりしているのかというと、決してそうではない。子どもとは素晴らしいもので、大人から与えられた状況の中でも、楽しんで多くのことを学ぶことができるものなのである。

私の園では、行事のときには年長、年中、年少と一緒に遊ぶことがあるが、日常の保育の中では、縦のつながりができるような機会はほとんどない。兄弟の数が少なくなっている今、縦割りの保育は多くの教育的要素を含んでいるのではないかと思っているが、実は通園バスの中で子ども達は、この縦の関わりを経験するのである。

B子が途中入園してきたとき、周囲の子ども達は入園後約九か月を経ており、すっかり園生活にも慣れ、活発に活動していた。おとなしいB子は、圧倒され、一人ではなかなか行動を起こせずにいた。クラスの中では担任が援助することができたが、通園バスではどうかと、多少不安であった。ところが、

B子が利用することになった停留所の一歳年上の男児が、B子の面倒を細かく見てくれた。おかげでB子は、あまり困ることなく、バス通園できるようになったのである。

そのB子が年長になった。B子は一人っ子ということもあって、これまでに人に面倒を見てもらうことはあっても、小さい子の世話をしてあげる経験はほとんどなかった。だが、B子は、新しく入園してきた子ども達の面倒をよく見た。かばんがかけられないと、手伝ってあげ、転んで泣いていると、先生を呼びにきた。くつを履きかえるのを待っていて、一緒に手をつないで並んだ。ときには、泣いている子をなぐさめてあげたりもした。

私たちは、新入園児が入ってくると、年中、年長の子ども達に、「小さい人達に親切にしてあげてね。」と言う。けれども、自分がしてもらっていないことを、子ども達は、きつとできないに違いない。自分が小さかったときに、お兄さんお姉さんに

してもらったことを、今度は自分達がするのだ。そういう意味で、通園バスのなかで子ども達は、人に親切にするという行為を、身をもって体験することができるのだ。

毎日顔を合わせることに、同じ路線の子ども達は、年齢を問わず仲良くなる。これは母親同士も同じことで、特に停留所を同じくする親同士は非常に親密になる。これがまた、親子の精神状態の安定にプラスになっていると考えられる。

バスを運行している園のマイナス面として、地域的なつながりが薄いということがあげられる。実際、いろいろな地域から子ども達が通園しているため、仲の良い友達同士が互いの家に遊びに行くということが非常に難しく、幼稚園から帰ってからの家同士の付き合いまでにはなかなか発展しない。そのうえ、最近では近隣の付き合いが少ない集合住宅に住む家庭が増えているため、親子が孤立してしまいかねない。そんなとき、通園バスの停留所で、同じ

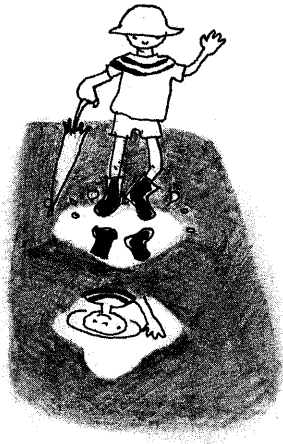
園に子どもを通わせる親同士が親密になり、互いの悩みを話し合える関係にまでなると、親の気持ちが大不安定ではなくなる。

実際にこんなことがあった。C子は、遠距離通園をしている子で、しかも電車通園であった。母親があまり社交的でないうえ、とりわけ地域的に周囲から離れていたため、まず親が親しく付き合える人ができなかった。子どもも、親の影響があつてか、遊ぶには遊ぶのだが、親しい友達がなかなかできず、約一年間、親子共々どこか不安げな表情で過ごした。

年中になり、あるきっかけから、C子は電車を乗り越して、その駅から通園バスを利用することになった。その停留所はたくさんの子どもが利用しており、中には違う年齢ではあったが、同じような方法で通園している子どももいた。毎日顔を合わせることに、まず子ども同士が仲良くなり、それから母親同士が親しくなつて、互いの家を行き来する

までになった。不思議なことに、それからC子はクラスの中にも親しい友達ができ始めた。母子ともに表情が明るくなり、担任としても、今まで借り物のようで、どこかお客さんのようだったC子に、この園の子どもとしての存在感を感じられるようになった。家ぐるみで付き合う友達が幼稚園にいるのといないのでは、こうも違うものだろうかと思ったものだった。

通園バスには、このようにプラス面もある。しか



(洗足学園大学附属幼稚園)

しながら、子ども達にとっては、やはり「待つ」時間であることには変わらない。その時間を、ただ「待つ」時間ではなく、楽しい時間になるように援助するのが、バスに乗る保育者の務めであろう。私は、バスの中で子ども達といろいろな話をする。友達のこと、兄弟のこと、テレビのこと、おけいこのことなど、保育中には聞けない話がたくさん飛び出す。それがまた、私にとっては、子どもを理解するための一助となるのである。

## プラハの子らの夏休み

大槌 優子

クリスマス休暇があげ、仕事や学校を中心とした平常の生活にもどると、まもなく、知人達からこんな質問をされる。

「この夏の休暇は、どちらへ？」

「もう休暇の予約は終えましたか？」

笑顔でうなずきながら、具体的な期間や目的地を挙げたいところだが、たいていは、この瞬間になって、半年先の予定に思いを巡らせることになる。それでは、もう遅い。旅行社や職場が仲介役となる夏休み計画は、十一月に予約を受け付ける。そのこと

がわかっている、家庭の団らんはその話題を持ち出しにくい。家族は、皆それぞれのこと忙しくしているし、それでなくとも、家族全員が夜になって出会う生活では、その時しなければならぬと思えることが多々あるものである。それらを優先させて日を延ばしているうちにクリスマス準備に入り、あわただしく新年があけるといふわけである。

知人宅で「さて」と考え始めて、ようやく我が家に夏休暇の話題が登場する。中心になるのは、家族そろって過ごす二週間か三週間の計画である。この

国の勤労者には、二十日間、つまり四週間の年休が認められていて、最低三週間以前に届け出なければならぬとされている。だから、急病の場合に年休を利用することはできない。本人の病気休暇、あるいは子どもの看病休暇を願い出ることになる。年休は、健康な状態で、心身をリクリエイトさせる目的で利用されるものである。多くの人々は、夏と冬にかけて休暇をとる。学齢期の子どももつ家族は、七月と八月に夏休暇をとることが優先され、それ以外は、五月・六月、九月・十月にとっているようである。およそ三月の半ば頃までに職場に年休届けを出し、勤務者間の調整をとる。届け出を怠っていると、係から呼び出されるそうである。こうして、外部者から見ると、職場の機能がストップするのではないかと思われるような夏休暇期間が準備されていく。休暇をとる側も、数か月かけてプログラムにあった準備を進めていく。それをまた楽しんでいく。休暇の過ごし方がゆったりと充実するはずで

ある。

太陽の沈むのが九時頃になる六月中旬、子ども達は、勉強中心の生活に疲れ、それにつきあう大人達も解放感を味わいたいと秘かに思い始めるようになると、人々の話題は、夏休暇のことで花開く。団地内のバス停で、子ども達の同級生の父母に出会うと始まる。

「夏休みが楽しみですね。」

「お子さん達の夏休み計画は？」

会話を波に乗って、にこやかに答える。

「七月ははじめの二週間は、体験入学という形で、日本人学校に通います。八月ははじめの二週間は、家族で山に行きます。」

そこで再び、こちらの人々の「子どもの夏休みの生活」の概念からはずれていることに思い知らされる。

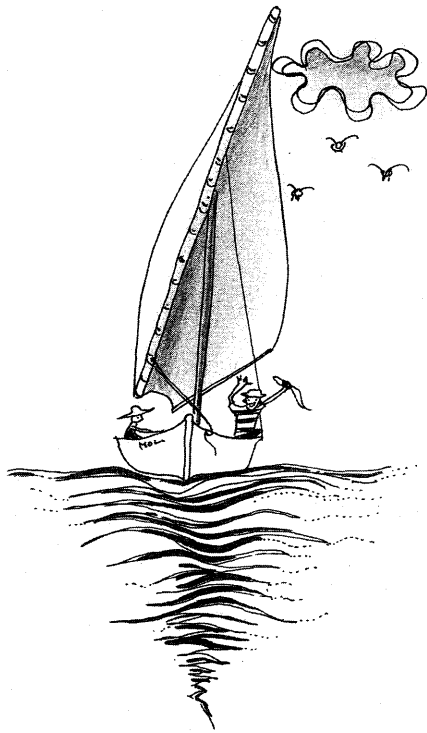
「夏休みに学校へ？ 夏休みにも勉強させるのですか？ せっかくの夏休みなのに……。」

「家族旅行の前は？ 後は？。」



らない事情に寛容であるらしかった。職場の側の不都合と同じ次元に並べて対立させない、勤務者の配慮を感じた。子を連れて勤務する人が一番大変な思いをしているというところが、誰の胸にもあるのだろう。子ども達は、診察室の隣の部屋にいわば閉じこめられて過ごしたわけだが、夏休みの思い出をテーマにする作文で、この体験をとりあげた年もあった。

学校、家庭、山、親の職場で各二週間ずつをすこ



す子ども達の夏休み計画を聞いて、気の毒そうな顔をして終わる人ばかりではない。田舎家へ来て合流するよう勧める友人達もいる。両親は、週末に子ども達のところに通えばよいというのである。都会の空気よりも、家族の絆を重視して、結局は合流計画を実現させないまま今日に至り、子ども達もそろそろ独自の夏休み計画を必要とする年齢になってきた。

家庭の子、自然の子として、二か月の夏休み生活を充実させたいと思っても、両親だけでは担いきれ

ない。祖父母、友人などの助力者を必要とする。その助力者を社会に求める場合もある。職場や地域の青少年の家が組織する合宿、キャンプである。山や湖など豊かな自然に抱かれての集団生活を基盤にして、いろいろな活動をしている。各分野のフィールドワーク、外国語研修、各種スポーツの技能訓練など、様々な領域にわたっている。専門の指導者を中心に、大学生あるいは高校生が補助指導者として参加している。これらの経験が、教育実習、その他の実習単位の一部として認められるということである。「未来の専門家」としての資格を活かしているものももちろん。開催規模が、国際的なものから地域的なものまで、実に多種多様で数も多い。家族で過ごす休暇以外の夏休みは、いくつかのキャンプに参加して過ごすという子ども達もいる。同じキャンプに二期間続けて参加する子ども、毎年参加して遂にはその補助指導者になるというケースもある。

我が家の子ども達が参加することから、偶然私達

両親も指導チームの一員として協力参加したキャンプのことを紹介しよう。

名前をつけるとすれば、「カヌー教室」である。

ブラハ市中心を流れるウルタヴァ（モルダウ）川の上流、チェコの南の国境近くの川岸が開催地となる。カヌーの技術を習得しながら、ウルタヴァ川を下ってキャンプ地を移動させ、二週間のテント生活を続ける。対象は、水泳のできる十歳から十四歳までの子ども達である。

四十人の子ども達に、十四人の指導者チームがつく。そのうち七名は、子ども達のグループを担当する。一人の指導者が、五、六人の子ども達をうけ持つことになる。他の場合でも、一般にグループが十名を超える時には、必ず助手がつく複数指導制になっている、無理のない指導体制をとっているのは興味深い。

川沿いの野原に、二十余りのテントが並ぶ光景



は、さながらインディアン<sup>①</sup>の集落を思わせる。その生活も、外部から食料を調達する以外は、原始のそれに近い。森へ枯れ木を集めに行つて、薪をつくり、火をおこし、調理する。丸太にすわつて食事をし、川で皿を洗う。カヌーの講習をうけながら、キャンプ場の近くで練習をする。カヌー遠足を上流とする時には、運搬車が活躍するが、十キロメートル以内の地点までは、人は徒歩である。子ども達はよく歩く。遠足といへば、二十キロメートル位を歩くのは普通になつてゐる。カヌーでの川下りが終われば、その補修も自分達でする。明るい間にテント内の身辺整理をし、寝袋を整えて夜に備えなければならぬ。電気も水道もない生活に、必要な知恵が、自ずと働くようになる。

こうした活動を主軸にして、さまざまなプログラムが展開する。スポーツを楽しみ、森を探検し、古城を見学し、修道院のコンサートにでかける。文化的なプログラムの時、スポーティではあつても、そ

れに合った服装をした子どもたちがテントから出てくるのをみて、私は正直言つて感心した。一輛の汽車に乗つて、近くの村の室内プールにも行つたが、それは水泳よりもむしろ温水シャワーを意図しているようだった。最後のキャンプ移動は一日がかりの行程で、ゆったりとした流れを下つて行つた。

町の生活では、楽しみの部分だけを安易に手に入れていることに気づかされ、「くらし」を創つていくことの大変さやおもしろさを体得していく、二週間の経験<sup>②</sup>だつたようである。

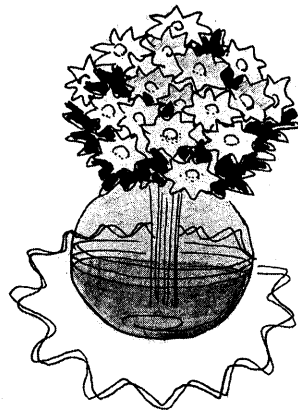
大人の私自身は、常に「生活の本質は何か。」と自分に問いかけて行動決定する日々の連続で、キャンプ生活をくつろいで楽しむまでに至らなかつたことを告白しなければならぬ。

幼稚園時代から、二週間の林間合宿をこなして成長していく子ども達のたくましさは、そのまま「自然の子」のそれにつながるのだろう。

(ブラハ在住)

# 忘れられない失敗

松井 とし



五月のある日、四歳児のN子が鉄棒から落ちて舌を縫う大けがをした。

その日子どもたちは手をつなぎ、並んで歩いて、初めて園外の公園へ出かけた。固定遊具で遊んだり、クローバーをつんだりして、帰り支度を始めようかと思っていた矢先、ずっと鉄棒の所にいたN子とY子が手をつないでやってきて言った。

「クルンって出来たの！」

「そう！ じゃ見せて」

それ迄の間に、彼女たちの存在を眼で追いつつも、かわりをもてなかったという思いが先に立ち、私は二人の後について行った。身も軽く、すっかりマスターしているY子は、片足をかけてぶら下がり、後ろ向きに下りた。その横でN子は、足がつく前に手を離し、ドスンと重たく落ちた。そして、咄嗟の時には本能的にひっこめると言われる舌を、

自分の体重をかけて噛み切ってしまった。

母親は、あいにくデパートへ出かけていて緊急連絡がとれない。事情を話し励ます私の言葉に、N子は静かにうなずき一人で医師の処置に耐えた。

N子は、いわゆる育児者の一般編が通用しなかった子どもでもある。母親は同年齢の子どもを求めて公園へ出かける。親同士はすぐ親しくなるのだが、当のN子は母親から一歩も離れない。子ども同士の遊びをほとんど経験せず、園の生活を始めたN子は、歩く、走る、跳ぶ等の、身体の基本的な動きにもぎこちなさが見られ、私は、彼女のアンバランスな発達をとらえていたつもりであった。

なのに、あの一瞬の心の空白はどうした事か。前転ではなかったので気が緩んだのか。私の意識は「支える」姿勢をとっていなかった。

幸い経過は順調だったが、傷が癒えてからN子の激しい母子分離不安が再燃した。彼女が心の葛藤を吐き出し、新たな自己に出会い、自信に満ちた生活を始める迄に長い時を要した。N子のけがは、私にとって許されない過ちだったが、保育の専門性や発達を考える際のターニングポイントでもあった。

(神奈川県立教育センター)

# ごっこ遊びと社会的知能の関連の 可能性について

柴坂 寿子

幼稚園の園庭で歓声をあげながら追いかけてっこをしている子供達。部屋のすみっこで、おままごとをしている子供達。近づいていって、「ねえねえ、みんなは一体全体なぜ遊ぶの」と問いかけてみたらどうだろうか。きつと「だって楽しいもん」、「遊びたいから」といった答えが返ってくるのではないだろうか。変なことをきくんだねという顔をしながら。

子供達は遊びそれ自体に強く動機づけられている。遊びは遊んでいる本人達にとっては、何かのためではなく、遊びたいから遊ぶ自己目的なものであり、楽しい、おもしろいといった主観的体験そのものである。

一方、遊びを外側からながめている大人達が問うのは、「子供達はなぜこのようにも強く、遊ぶことに動機づけられているのか」ということであろう。

動物行動学の研究者が、目の前に繰り広げられるある行動についてなぜかと問うとき、そのなぜに対しては四つの違った答えがあるといわれている。例えば「ホシムクドリが春にさえずるようになるのはなぜか」という疑

問を出したとする。第一の答えは、繁殖に際してつかう相手を引きつけるためといった機能的な答え。第二の答えは、日長が長くなったことが体内のホルモンレベルを変化させたからとか、鳴管を空気が通って声帯膜をふるわせているからといったメカニズムに関する答え。第三に親から歌い方を習ったからといった個体発生に関する答え。第四に、彼らの祖先のもっと簡単なさえずりからどのようにして現在の複雑な歌が生まれたかを示そうとする、系統発生に関する答えである。

この四つの答えは互いに排除しあうものではない。なぜホシムクドリが春に鳴くのかに対して、繁殖のためという答えと、日長が長くなったためという答えのどちらが正しいのかという問いは意味がない。両方が別のレベルにおいて正しい答えであり得るからだ。一つの事象を多面的にとらえるということは、こうしたレベルを区別して問いを発し、答えることなのではないだろうか。子供達の遊びへのなぜを、こうした四つの視点から言い換えてみたらどうだろうか。第一には、遊びにはどう

いう機能があるのだろうか、どんな生存上の意義があるのだろうか、といった問い。第二には、遊びにはどんな認知的過程がかかわっているのか、どんな内的なヘッドウェアが作動しているのか、といった問い。第三には、遊びは生まれたときからどのように発現し発達してくるのか、という問い。第四には、遊びは系統発生的にはどのようにして発現し、進化してきたのか、という問いである。

以下ではまず第一の視点を軸に、「なぜ子供たちは遊びに強く動機づけられているのか」を考えていきたい。

\*

遊ぶといわれる動物の系統分類上の分布は、かなり限られている。遊びが報告されているのは、ほとんどが哺乳類や鳥類においてである。これに対して昆虫、魚、両生類等は遊ばないといわれる。遊びが進化的に新しい動物に限られていることから、形態的には体制がより複雑

化し、中枢が発達した動物、行動的にもやはり複雑で、より学習に依存して行動が形成されるようプログラムされた動物が遊ぶのだろうと考えられる。

遊ぶといわれる動物では、遊びは特にコドモに多く観察されている。オトナになると遊びに費す時間は多くの種では減少し、ほとんどみられなくなるといわれる種もある。

オトナも遊ぶ種では、オトナは採食の後などのように充足しており、また外敵に対して安全だと思われる時に遊ぶといわれる。すなわち、同種他個体とのなわばり等に関する闘争、捕食者からの逃走、食物を得るための狩り、といった生存上の活動が活性化されていないときオトナは遊ぶらしい。

遊びの中味をみてみると、闘争、逃走、狩り、といった行動のレパトリーを含んでおり、一見すると、こうした目標志向的行動とよく似ている。しかし目標志向的行動のように、目標が達せられて終わるというのではなく、例えば仲間から逃げおおせて目標を達したはずのネ

ズミがまたすぐに穴から顔を出し、新たにまた追いかけつことが始まったりするのである。また行動の順序も目標志向的活動とは違っていることがあり、また例えば闘争に似てはいるが威嚇しないなど、重要な要素が欠けていることもある。違った種類の目標志向的行動（例えば闘争と性行動）に属する行動が混じっておこることもある。こうした行動の様相からして、遊びにおいては本来ある目標志向的行動に属する、統合的には下位の行動が部分的にばらばらに活性化され、つなぎあわせられ、繰り返されているのだろうと考えられている。

動物には種に固有の学習の制約、方向づけがあり、種によってどんなことを学習しやすいかが異なっていることが知られている。そしてこの学習される領域は、その種でどんな環境が変異に富み、後天的にそれについて学習することの方が、遺伝的に一定の行動をするようプログラムされることより有利であるかに対応するといわれる。

例えばコクマルガラスは自分たちの卵やヒナについての学習能力は低い。しかし集団コロニー内部で互いに個体識別する能力は高い。この個体識別に基づいて、コクマルガラスの社会的順位制が形成される。さらに順位の低いメスが高順位のオスとつがうと、メスの順位を自動的に上げるといふ高度な学習・記憶の能力をみせる。

セグロカモメは自分の巢の場所はよく覚えており、これによって自分の卵がどれかも分かると思われる。卵そのものについては、色や模様のパリエーションが豊かであるにもかかわらず、自分の卵と他の卵を区別できない。ところがいったん卵がかえってヒナが生まれると、人間の目にはどれも同じように見えるにもかかわらず、短期間に自分のヒナを識別できるようになる。

このような学習における方向づけと同様に、種によってどんな遊びが行われるかは、ほぼ決まっているように思われる。さらにその遊びの内容は、その種のオトナが行う、生存上重要な活動と対応関係があるように思われ

る。

例えばオトナになって同種のメンバーと闘うライオンなどは、闘争に似た遊びを行う。狩りをする種では、接近する、獲物を倒す、振りまわす、忍びよるといった動作が遊びに表れる。また同じ追いかけてこども、狩りをする動物では追い手にまわった方が熱心であるが、捕食される側の草食動物では追われる方が熱心で、つかまえることは度外視されるといわれている。

また、遊びがその後のオトナとしての活動にとって重要なのではないかという間接的証拠として、同輩から隔離されて育った動物の行動上の欠陥があげられる。ヨーロッパケナガイタチは同輩から隔離されて育つと、逃げようとするネズミの体にむやみにかみつつき、ネズミの抵抗にあう。しかし兄弟と共に育った個体は、よりすばやくネズミの首根っこをかむことを覚える。さらに隔離されて育ったオスは求愛のときにメスの体をどこかまわらずつかもうとするが、兄弟といっしょに育ったオスはメスの首根っこをつかまえる。こうするとメスはおとなし

くなる。ただし交尾そのものには双方で差はない。同様のことがミンクやテンジクネズミ等でも知られている。さらにアカゲザルでも隔離されて育ったオスは、メスに馬乗りになれず正常な交尾ができない。そして生涯これを学習できない。

遊ぶことがその直後の問題解決を効果的にするという証拠がある。棒をもったことのないチンパンジーは、檻の外にあるバナナを棒を用いて引っぱり込めなかったのに、三日間棒で遊ばせておくと、同じ問題を二十分間で解けたという。また人間の子供達（三〜六歳）でも、道具を使って箱を開ける課題で、道具をもて遊ぶ時間を与えられた群で、問題解決の成績がよかったと報告されている。

遊びの機能を運動技能や社会的技能の学習、練習としてとらえる説は、今まで述べてきたような知見に基づく。遊びの意味については、他に剰余エネルギー説等があるが、遊びに積極的機能を認めず、付帯的現象として

とらえているものである。学習・練習説以外に遊びに積極的機能を考えているものとしては、いっしょに遊ぶことがグループとしてのきずなを固めるとする説、とっく





みあいなどの遊びをすることで、グループ内のメンバーの能力を査定するという説などがある。集団生活を営む種については重要な指摘といえよう。

技能の学習・練習が事前にされれば、実際に必要になったときには、すでに習熟された有効な技能で対処できる。追いかけてこずばやい身のこなしを身につけたリスは、実際に捕食者に襲われたとき逃げおおせる可能性が高くなるかもしれない。これは人間の言葉遊びについても指摘されている。日常生活ではふつういわないが文法的には可能な文を作り、それを笑うことで、文化的にはまちがいであることを確認しているのではないかといわれる。

遊びの場では、今の例でいえば、その「まちがった」発話がまじめにとられ、コミュニケーションに支障をきたすことがない。また遊びの中で集中して繰り返し練習すれば、技能が洗練され、身につく程度も、単発的な実際の場での経験より高いかもしれない。

もしこのように「将来オトナになったときに必要とさ

れる技能を、その技能が本当に必要とされる以前に時間をとり、集中して学習・練習して身につけておく」という風にコードモの遊びの機能をとらえるとすれば、人間の子供の遊びではいったいどんな技能の学習・練習がされているのだろうか。

追いかけてこやとつくみあいなどは、人間の子供達もよくする遊びである。これらの遊びでは他の動物のコードモ達と同じように、動きの協調など運動技能が訓練されることは当然考えられる。人間に特徴的だといわれる遊びは、新しい物を作りだす構成的遊び、ごっこ遊び、言葉遊び、ルールを伴うゲーム等である。

ここでは特にごっこ遊びを取り上げて、物を他の物に見立て、話の筋を作り、それらしい動作や会話で役割を演ずることが、大人になって必要な何を学び、何を練習しているのかを考えることとする。

ごっこ遊びでのやりとりに注目して、コミュニケーション上の機能、例えば遊びの中で何の役割を取るかと

いった交渉の技能等の訓練とする考えがある。ごっこ遊びの内容に注目して、大人の社会的役割に伴う行動、例えば先生は生徒に対してどんな話し方をするものか等を、自分が経験や観察で集めた知識をもとに、実際にやってみて身につけていくとする考えもある。

もう一つの可能性としてあげられているのは、ふつう虚構性とよばれるものの学習・訓練である。いいかえれば、内容は様々としても、ごっこ遊びの中で「ふりをする」「演技する」ことを学習し練習しているのではないかと、いう説である。ここでは「ふりをする」ことを他個体に自分がどう見え、思われるかを軸に、他個体に自分が与えたいと思う視覚的、聴覚的情報を流すために、自分の行動を制御すること、つまり必ずしも自分の本来の意図や内的状態とは一致しないような一連の行動をしたり、行動の程度を誇張したり、抑制したりすることと考えておく。

「ふりをする」「演技する」ことの重要性は、最近の霊長類学、人類学、行動学での人間の知能の進化について

の議論の上で、「社会的知能」と関連して指摘されてきた。

人間の知能の進化の原動力になった要因としては、道具使用など、物理的環境に働きかける上での知能の有利さがまず思い浮かぶ。例えばふつうではとれない塚の中のシロアリを、小枝をシロアリの巣アナにつっこんで釣りあげることができるチンパンジーは、他個体より生存上有利だろう。ところが集団で飼育されているチンパンジーの行動観察から、彼らがお互いの間のやりとりで、道具使用にみせる知能に勝るとも劣らぬ知能を發揮していることが明らかになってきたのである。

オランダのアーネム動物園では、二十三頭のチンパンジーが放牧場で飼われていた。ある日、オスのチンパンジー、イエルーンは、他のオス、ニッキーとの争いで片手を軽くけがした。しかしびっこをひいていたので、だいぶ痛いのだろうと観察していた人間達も思っていた。ところがそのうち意外なことに人間達は気づいた。イエ

ルーンはニッキーの前を通っているときはびっこをひいていたが、ニッキーの視野外に出ると、途端に正常に歩き出したのである。こうしたことは一週間も続いた。明らかに、イエルーンはニッキーに自分がケガをしていると思いつまさせるために、びっこをひくという演技をしていたのである。

アメリカ、ルイジアナにある霊長類研究センターでは、六頭のチンパンジーのうちの一头にだけ放牧場の中のバナナのありかを見せてから他のチンパンジーのところに戻し、二分半後に全員を放牧場に放して、彼らがどのようにしてえさを見つけてるかという実験が行われた。ふつうはえさの場所を知っている個体がありかに近づき、他の個体はそれについていく。ところがベレというメスがこのリーダー役になったとき、ロックというオスがバナナを全部取ってしまうという事件が起きた。何度かこうしたことが続いたあと、ベレはえさのありかには近づくが、えさの上ですわりこんでロックに取らせないという対抗策に出た。しかしロックは力でベレを押し

けてバナナをとってしまった。次にベレは、えさのあるだいたいの方向に行くだけという対抗策をあみだした。しかしロックはベレのいるあたりを片っ端から捜しまくって、えさを見つけてしまった。

しまいにはベレは、仲間をまずバナナのありかとは全く反対の方向に導き、すきをねらって自分だけえさのありかに走っていくという策をとるようになった。このときベレはあたかもバナナがあつちの方向にあるかのようにふるまっていた訳である。

同様の実験が京都大学の松沢氏によってペンシルバニア大学の霊長類研究施設でもなされている。長年アイというすぐれたメスのチンパンジーを相手に図形文字を訓練してきた松沢氏は、社会的な場面では、ごく普通のしかもまだ子どものチンパンジーが、何の訓練もなくすぐれた知能を発揮することに感嘆されている。

アメリカ、ジョージア州立大学に飼われていたチンパンジーのうちの一头、オスのカンジーは、言語の実験中に、他の実験に加わっているチンパンジー、オースチン

とシェアマンのところへ行きたいと図形シンボルを使って実験者に伝えた。実験者がダメというとは今度はメロンが食べたいといった。実験者はカンジューを伴ってメロンの置いてある方へ歩いていった。その途中にある、オーステンとシェアマンが積木をしている場所に近づくと、カンジューは飛び出して、仲間に加わろうとした。実験者がカンジューをひき戻し、メロン置き場への散歩を続けさせようとすると、カンジューはその気がなさそうにだらだらとついてきて、メロン置き場に着いても食べようともしなかった。明らかにカンジューは自分の最初の目標を達するために、メロンが食べたいといったのである。

こうした社会的知能にもかかわらず、チンパンジューの集団での社会的遊びは、追いかっこやレスリングが主で、ごっこ遊びにあたるような、またそれにつながるような遊びは報告されていない。

ただし、人間の家庭で小さい頃から育てられたチンパ

ンジューのひとり遊びや、人間を相手にした遊びでは、物の見立てやふりといってもよいような行動が見られている。

ガードナー夫妻に育てられたチンパンジューのメス、ウォーシユューは一歳半から二歳までの間、自分の人形を水の入ったたらいにつけて、また取り出し、タオルでふくという遊びをみせた。人形に石けんをつけることもあった。

ヘイズ夫妻に育てられたチンパンジューのメス、ウィッキューは、おもちゃをひもでひっぱって歩き回る遊びから、やがてひももおもちゃもなしに、あたかもひもでおもちゃをひっぱるようなふりをする遊びを發展させた。そしてあるとき、ドアのとつてのところで、まるでひもがからみ、おもちゃが動かないといった様子をして止まり、からんだひもをはずそうとするふりをして、ヘイズ夫人を呼んだ。夫人がひもをはずすふりをして「はずれたわよ」というと、ウィッキューは喜びの表情をみせたという。

今度は夫人の方がおもちゃをひっぱっているふりをすると、ヴィッキーは夫人の方ではなく、おもちゃのあるべきところへ走っていった。そして夫人が止まると、おもちゃが止まったはずの地点に立ち止まり、しばらくそこを見つめたあと感嘆の声をあげたそうである。また、毎朝、新聞を持ってきて、長いすに座り、新聞を大きくひらいて見出しをざっと追うようなふりをしたという。

前に述べたカンジーは、目に見えない物を毛布や草木の下に隠すふりをしたり、それを取り出して食べるふりをするのがあった。ときには悪くなったところを食べべてしまったというふりをして、はきだすふりをしてから、図形シンボルを使って「悪くなっている」というコメントをした。

こうした観察からは、チンパンジーが少なくとも単純なごっこ遊びをするだけの潜在的基盤は持っていると思われる。

しかしチンパンジーは自然状態では自ら仲間とごっこ

遊びにあたるような遊びをしないのに、人間の子供達は自らごっこ遊びへの動機づけを持っている。このことは、人間においてはチンパンジーよりもっと「演技する」「ふりをする」ことが訓練される重要性が大きいことを示唆しているのではないだろうか。つまり人間ではもっと高度の社会的知能が発達していることを示すのではないだろうか。

ごっこ遊びとは、みんながこれは「うそっこ」であり、シリアスなやりとりではないことを了解した上で、思う存分演技を訓練している場なのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)

# 子どもの成長発達を促すために必要な

## 玩具についての考察(2)

— 西ドイツ製玩具・プレイモビルを

利用しての実践研究の報告 —

芸術教育研究所  
おもちゃ研究室

◇実践研究をよんで下さる前に

五月・六月の実践にひきつづき、今月号では、夏の季節を十二分に生かした実践研究、七・八月と九月に亘った報告をまとめました。

勿論ここでのポイントは夏の季節のみでなく、園における集団がどのように玩具ととりくんでいるか、それに併せて、年齢的なそれぞれのかかわりなどをよみとっていただければ幸いです。

### ◆実践報告Ⅱ◆

前号にひきつづき七・八・九月の実践報告を

〈七・八月……船の完成と出帆(旅立ち)〉

2 歳 児	1 歳 児	
<p>○紙でつくった船とブレイモビルの船とをプールに浮かべ、動かして遊ばせる。</p> <p>○プールのまわりに子どもを集め、板を使って、船をプール内にすべりこませる。</p> <p>○人形を船上にのせて遊ばせた後、その他の水遊び用の容器（牛乳パックなど）を加え与える。</p>	<p>○水遊びの際に、船（保育者が完成済みのもの）を出し、浮かべてやる。</p> <p>○他の水遊び遊具（バケツや皿など）に、人形をのせてやる。</p> <p>○子どもに水着を着せ、プール内で遊ばせる。</p>	<p>保育者の働きかけ</p>
<p>○紙の船が沈むのを発見し驚いている。</p> <p>○船に人形をのせ、水面を走らせて遊ぶ。ビニールの貝を島にみたてて会話を始める。</p> <p>○船が浮くと、安心した顔つきとなり、拍手がおこる。</p> <p>○容器に水を入れ、船にかけて沈ませることに懸命となる。男の子は洋服を脱ぎ、プール内に入って参加してしまう。</p>	<p>○船に興味を示しながらも、バケツやスプーンで遊んでいる。（写真①）</p> <p>○人形を皿にのせて喜ぶ。</p> <p>○ブレイモビルの動物を水に浮かべたり、船を沈没させたりして楽しむ。</p>	<p>子どもの活動</p>

写真1

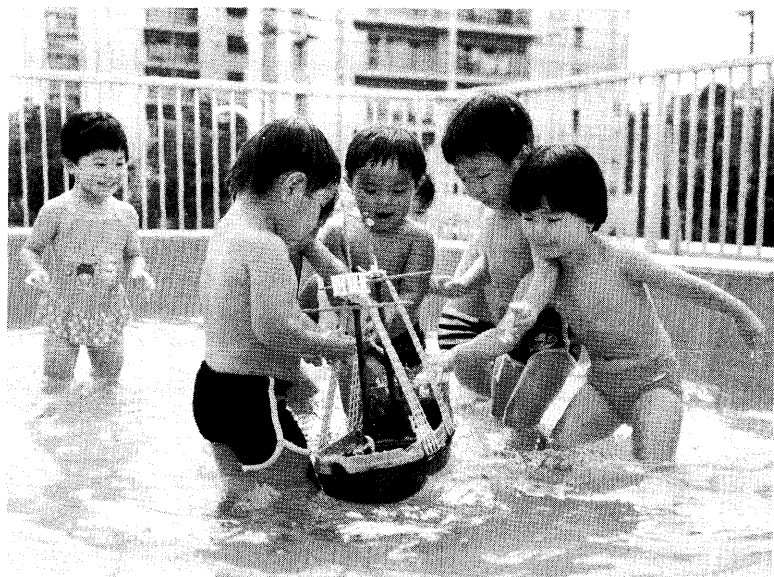


写真2



4 歳 児	3 歳 児	2 歳 児
<p>○「この船、浮くかな？」と期待をもたせ、家庭用プールに浮かべさせる。</p> <p>○青いビニールシートを広げ、カラーマツ</p>	<p>○完成見本の船を見せながら、部品を順に出してやり、船を組み立てさせる。</p> <p>○プールの中にビー玉を沈め、宝さがしをさせる。</p> <p>○プールに船を浮かべ波を作って遊ばせる。</p>	<p>○プール内に子どもを入れ、水しぶきをたてて波を表現させる。</p> <p>○人形と船を与え、遊ばせる。</p>
<p>○浮くとわかると、次は沈めて遊ぶ。(写真④)</p> <p>○船の部品を動かしたり人形をのせて船内を</p>	<p>○宝さがしに夢中になることをきっかけに、水に慣れる。</p> <p>○バタ足を使って波を大きくしていき、興奮しながら楽しむ。</p>	<p>○怖がる子もいるが、波づくりを楽しむ。</p> <p>○最初は船のとりあいがあったが、一人ずつ人形を与えるとみんな、船を潜水させ、遊ぶようになった。(写真②)</p>

▶ 写真 3



◀ 写真 4



写真5

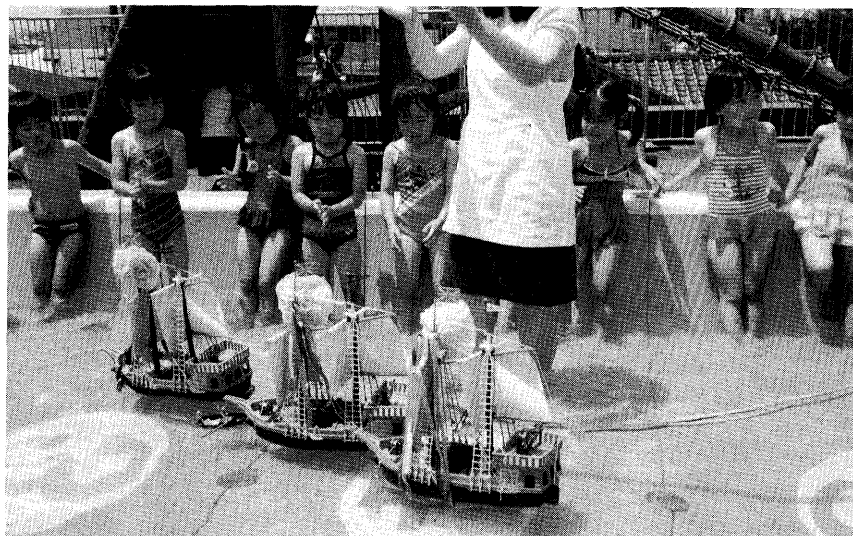


写真6

▶ 写真 7



▼ 写真 8



〈九月……島の発見・動物との出会い〉

1 歳児	
<p>○別室のあちこちに動物のプレイモビルをかくしておく。</p>	<p>保育者の働きかけ</p>
	<p>子どもの活動</p>

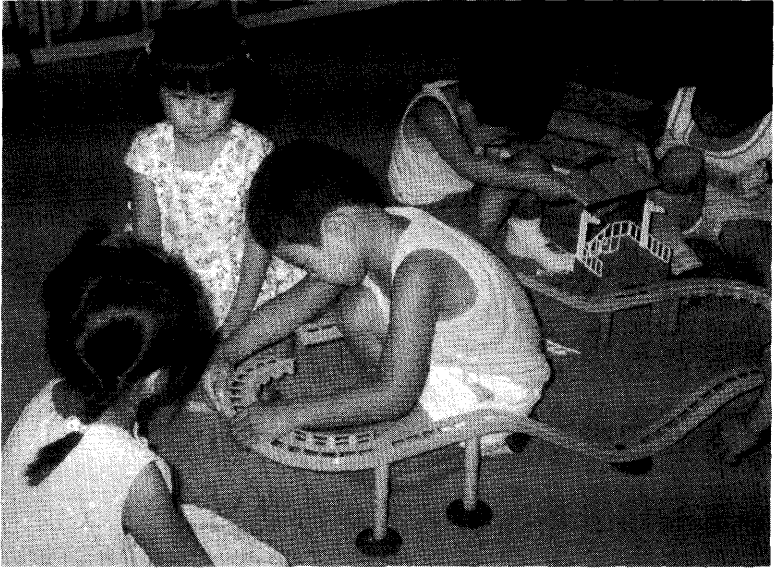
5 歳 児	4 歳 児
<p>○船の水に浮かばせる。</p> <p>○船を水に浮かばせる。</p> <p>○音楽と鈴わりの準備をしておく。</p> <p>○子どもに水着をきせ、水遊びのルールを教える。</p>	<p>トで港をつくり遊ばせる。</p>
<p>○船が水に浮いた時は大きな歓声をあげ、喜ぶ。(写真⑧)</p> <p>○人形を水に浮かせたり、とびこませたりして遊ぶ。</p>	<p>移動させたりして遊ぶ。(写真⑤)</p> <p>○波や嵐を想像しながら港の出入りをして遊ぶ。(写真⑥)</p>

3 歳児	2 歳 児	1 歳児
<p>○ コロンブス大陸発見の話をする。</p> <p>○ 動物園づくりを促し、小グループごとに作らせる。</p>	<p>○ 子どもの登園前に「動物園へ行こう」と誘いかけ、子どもの人形を船にのせ、紙製のお弁当を作らせる。</p> <p>○ 子どもを廊下を集める一方で、部屋内に動物園を作っておく。</p> <p>○ 部屋の中から保母が動物の鳴きマネをして、部屋内に子どもを誘う。</p>	<p>○ 船に子どもの人形をのせさせ、別室に子どもを誘い、かくしてある動物をさがさせる。(かくれんぼ遊び)</p>
<p>○ 完成絵を見ながら動物園づくりをする。(難しい所だけ、保母が助ける。)</p>	<p>○ 動物園に行きの話のついで、食物や人形を船にのせ、動物に食べさせるまねをしなから、会話を楽しんでいる。</p> <p>○ 動物園に興味をもつ子がいる。</p> <p>○ 保母の鳴き声に耳を傾け、動物の名前を言い、人形と共に部屋に入り、一緒になって遊ぶ。(写真⑨)</p>	<p>○ 興味をもつ子どももたない子がいるが、動物をみつけると「あった!!」と上に掲げて見せ、嬉しそうな様子を見せる。</p>

写真 9

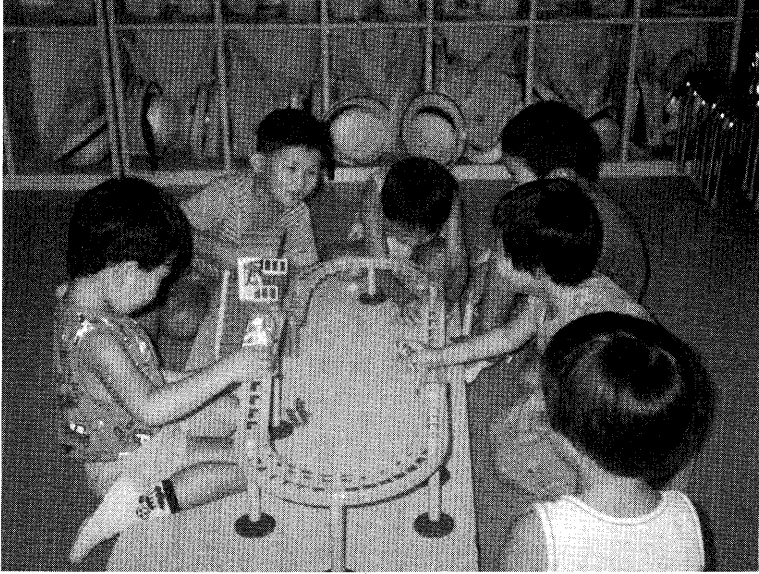


写真 10

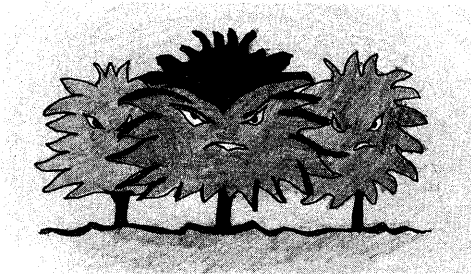


5 歳 児	4 歳 児	3 歳児
<p>○ だれもない島を「すてきな島」にするにはどうしたらいいか考えさせる。</p> <p>○ できた案を、黒板の設計図に記入する。</p> <p>○ 図を見ながら、プレイモビルを組み立てたり、絵をかかせたりする。</p>	<p>○ 船に人形をのせ、遊園地へ誘導する。</p> <p>○ 床に低い台をセットし、その上に遊具を並べさせる。</p>	<p>○ 子どもを二人組にして、会話遊びをさせる。</p>
<p>○ プレイモビルの完成図を見ながら、遊具を組み立てる。</p> <p>○ 画用紙を使って、地面・池・芝生などを描き、設計図のような「すてきな島」をつくっていく。</p>	<p>○ わからない所を保母にききながら、全員が興味をもって取り組む。</p> <p>○ 配置を考えながら遊具を置く。(写真⑩)</p> <p>○ 人形を船で、遊園地まで連れていき、子ども同士で順番を決めて、遊んでいる。(写真⑪)</p>	<p>○ 組になった二人が、すべり台やおにごっこをしたりする会話で遊ぶ。</p>





◀ 写真 11



夏休みも近づき、そろそろ、旅行などの計画を立てていらっしやる方も多いと思います。チェックでは半年以上も前から計画を立てるとは、おどろきました。我が家では、車にテントを積んでのキャンプが最大のイベントです。読者の皆様は長い夏休み、どの様な計画でしょうか。

今月号は“車”をテーマにとり上げました。子どもは自動車が好きです。特に身近なバスやパトカー、清掃車や道路工事のローラーなど“働く車”が大好きです。まるで、車に人格があるかのように、働きの者で、子ども達のアコガれです。車は、今や人間の手や足であり、私達の生活になくてはならないものです。ところで、その車がユーザーの注文を受けてから一台一台作られている、というのを御存知でしたか？色、形、タイヤ、内装品の全てにいたるまで、買う人の好みの注文で作られるのです。“在庫をおかない”というのが、自動車会社の

基本姿勢だそうで、お客様の注文を受けてから部品を取り寄せ、塗装焼きつけをして、組み立てるのだそうです。

小学生の頃、社会科学見学で横浜の自動車工場へ行きました。ベルトコンベアにのせられた車台上に、部品がどんどん取り付けられ、製品ができて上がっていきます。まさに“大量生産”でした。

30年経った今、“一つ一つが手作り”というイメージで、限定販売のものを除いて、自動車は同じものが二台とないというのです。まるで人間のようです。よく似ている人はいるけれど、同じ人はいないというようにです。オプションも種々とそろえて、お金さえ出せば、買う人の好みで好きな車を作ってもらうことができるのです。車も個性を主張する世の中になったのでしょうか。

それにしても、道路を走る車は、同じ様な形の同じ様な色ばかりが目立つのは、どういふことなのでしょう。個性を出すというのは、むずかしいですね。

## 幼児の教育

第八十九巻 第七号

(一九九〇年七月号)

定価四一〇円(本体三九八円)

平成二年七月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三一二九二七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

# 倉橋惣三「保育法」講義録

— 保育の原点を探る —

倉橋惣三「保育法」講義録

保育の原点を探る



保育の原点は、自ら育つ子どもにあるとする倉橋惣三の保育法。新幼稚園教育要領の精神の源です。



- ・ 昭和10年、倉橋惣三が最も円熟した時に行った保育法の講義録です。
- ・ これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれています。
- ・ 幼稚園真諦他の著作と対照し、理解の助けとする、脚注付です。
- ・ 新幼稚園教育要領と関連する箇所も示されています。
- ・ 現代の保育にとっての倉橋理論の意義を論ずる津守先生の序文がついています。

菊池ふじの・監修 土屋とく・編

B6判・256頁・定価1,500円(本体1,456円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館

ふしぎがわかる

# しぜん図鑑

●第1巻

こんちゅう

●第3巻

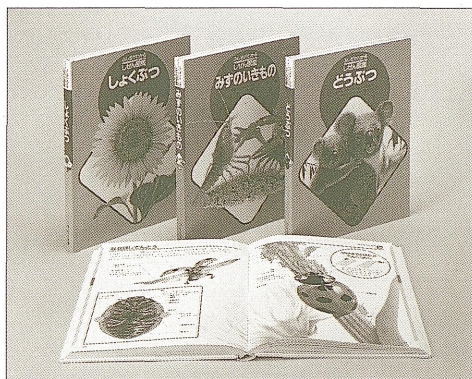
しょくぶつ

●第2巻

どうぶつ

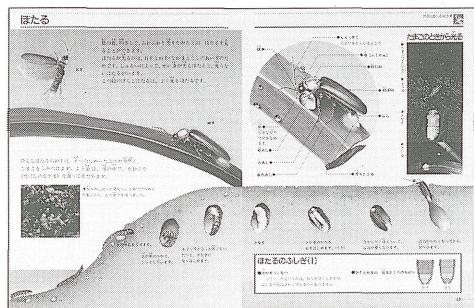
●第4巻

みずのいきもの

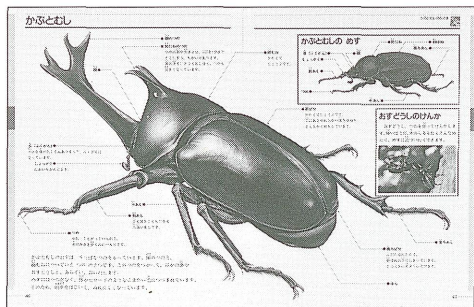


A4判・上製本・本文116頁  
全4巻・定価6,800円(本体6,600円)  
各巻定価1,700円(本体1,650円)

幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。

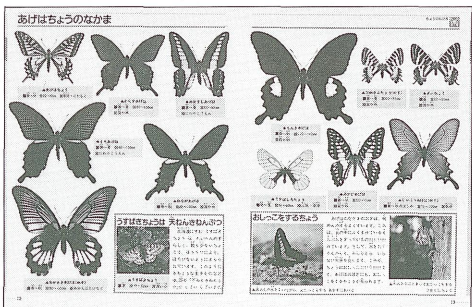


●なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげてあります。  
豊富な写真とイラストを組み合わせる構成してあります。



●スーパーリアリズムのワイドな画面によって動植物への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。

監修 水野丈夫  
こんちゅう 東京都多摩動物公園園長 矢島 稔  
どうぶつ 東京都井の頭自然文化園園長 増井光子  
しょくぶつ 園芸研究者 浅山英一  
みずのいきもの 国立科学博物館 武田正倫



●基本的な図鑑としての役割を十分に果たしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
フレーベル館